

アブラハムの生涯

## 旅立ち

主はアブラムに仰せられた。

「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。

そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

アブラムは主がお告げになったとおりに出かけた。・・・アブラムがカランを出たときは、七十五歳であった。創世十二章

聖書を開いたことのない読者でも、アブラハムという名はどこかで聞いたなと思われるのではないのでしょうか。米国史上最も偉大な大統領の名がアブラハム・リンカーンでした。紀元前二千年中近東に現われたアブラハムという名は、民族と時代を超えてこのように偉大な名となったのです。神の約束の成就でした。もっともこの人物の元の名はアブラムと違って、後にアブラハムという名を神からいただくことになるのですが。

アブラハムはイスラエル民族の始祖となり、世界の民族を超えて神を愛する人々から「信仰の父」とも呼ばれます。今回から、このアブラハムの生涯をご紹介します。

アブラムがこの世に生を受けたのは、紀元前二千年、ペルシャ湾に望む商業都市ウルでした。二十世紀初頭の考古学者の発掘によれば、当時ウルは店舗、家屋、図書館、学校も備えていました。背後はチグリス・ユーフラテス河に潤される肥沃な農地に恵まれていたので、大麦、小麦、亜麻、なつめやし、ざくろ、ぶどうなどが育ちました。この地でアブラムとその父は相当の資産家として成功を収めていました。

経済的に栄えるこのウルは、しかし霊的には暗黒でした。町の中心の階段状ピラミッド、ジグラッドの頂には月の神々の神殿がそびえており、そこでは神々の像の前で神殿娼婦や男娼たちが豊作祈願と称してみだらな儀式を行ない、人身犠牲も捧げられていたのです。

そんな町で創造主への信仰は、細々とアブラムの家にだけ受け継がれてきていました。ある日、アブラムの父テラが志を抱いて一族を率いて旅立ちました。けれども、チグリス・ユーフラテス河の源流地カランまで来ると、なぜか父テラはこの地に落ちてしまい、ここで生涯を閉じます。

父がカランの地で果てた時、アブラムは七十五歳でした。当時の人が長命であっ

たとはいえ、すでに功成り名を遂げた年齢です。けれども、ある日、彼は神の声を聞くのです。それが冒頭に記したことばです。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

最初は耳を疑ったでしょう。耳と言っても「心の耳」です。ほかの人には決して聞こえたわけではありません。それは言わば鼓膜の内側から響く声なのです。最初は気のせいだろうとアブラムも思ったかもしれませんが、しかし、いくら否定してみても、その声ははっきりとアブラムに対して命じるのでした。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

それは単に地上の旅立ちを命じることばではありませんでした。それはアブラムに生き方の変革を命じる神のことばでした。「アブラムよ。今まであなたは、あなたの親兄弟、親戚、隣人といった人々の中で守られ、あるいは彼らの顔色をうかがって生きてきた。しかし、これからは万物の創造主であるわたしに従って生きるのだ」と。

三浦綾子さんの文章にあったことばと記憶しますが、他者中心の人生は卑屈なものになってしまいます。さりとて、自己中心の人生は醜悪なものになってしまいます。人はただ神を中心に生きるとき、美しい人生を送ることができるのです。

人の顔色をうかがい、ただ波風が立たなければよいと思って、ひたすら自分を押し殺して生きていくと、後の日に「いったい自分の人生ってなんだったんだろう。こんな女に誰がした。」ということになってしまうでしょう。また、逆に、「私の人生は、私のものだ。どんな生き方をしようと私の自由だ。誰にも文句は言わせない。」というような生き方は、まったくもって醜いものです。

七十五歳にもなるアブラムが、神のことばに従って旅立ちの決断をしたとき、おそらく周囲の人々は、まず驚き、あきれたに違いありません。ある人々は「アブラムじいさん、とうとう神様に熱心になりすぎて気が狂ったらしいぜ。」とあざけったりしたことでしょう。もっとアブラムに身近な人々は、さしずめ「殿！ご乱心あそばせられましたか？」と反応したでしょう。彼には一声かければ動く男たちが三百人ほどいましたから、彼の決断の影響を受けなければならぬ一族郎党は総勢二千人ほどもいたのです。彼の立場は、いわば中堅企業の社長さんのようなものでした。アブラムの決断はおそらく周囲の人々には「なんと自分勝手な！」と映ったのです。

けれども、アブラムの人生の決断は、自己中心でもなく、神中心の決断でした。ですから、当面は多くの人々を当惑させることになりましたが、長い目で見ると、彼の一族ばかりか、世界のあらゆる民族に対して神の祝福をもたらす結果を生んでいくことになりました。

アブラムの子孫から二千年後その家系にイエス・キリストが誕生し、それからさらに二千年間、イエスの福音が宣べ伝えられて世界中の数え切れない人々が、イエス・キリストとの出会いを通して、絶望から希望へ、死からいのちへ、闇から光へとその人生を移していただいたのです。筆者自身、その一人です。

アブラムの信仰の旅立ちへの祝福の約束は、みごとに成就したのです。

「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

人生には時に旅立ちがあるものです。その旅立ちを万物の主に導かれて決断できる人生は、たいへん幸いな人生です。